

中国・前漢の時代、成帝の捷妤（=側室）の一人に班氏の娘という意味で「班女」と呼ばれた女官がいました。賢く家柄も良い班女は、帝の寵愛を一身に得ていましたが、ある日、宴席に現れた美貌の踊り子・趙飛燕に帝が一目惚れ。

寵愛の座を完全に奪われてしまいます。

班女は身を引き、その失意を詩にしたためます。
その中の、「秋になって捨てられる扇」にわが身をたとえた詩が後世に伝わり、男に捨てられた女のことを「秋の扇」に例えたり、「班女」と蔑称するようになりました。



一方、花子は、少将への恋慕のあまり物狂いとなつて各地をさまよい歩き、都にたどり着いていた。下賀茂神社で恋の成就を祈つていると、そこに少将一行が現れる。花子に気づいた従者が「狂女ならば面白く物狂いしてみせよ」と声をかけると、花子は思いの丈を大切な扇に託して舞うと、心乱れて泣き伏す。

それを見ていた少将が扇に気づき、互いの扇を確かめ合い、二人は再会を果たして喜び合う。

東国での勤めを終えた吉田少将は、再び野上の宿に寄り花子の不在を知らされ、戻つたら必ず自分を訪ねるよう言い置いて都へ戻ると、かねてより願をかけていた下賀茂神社に参詣する。

美濃国野上の宿の遊女・花子は、去年の春、東国行きの途中、宿に立ち寄った吉田少将と恋仲となり、再会の誓いに互いの扇を交換して別れた。以来、少将を待ち焦がれる花子は、約束の扇を眺め暮らし心ここにあらずの日々で、ついに客前にも出なくなり、周囲からは「班女」と呼ばれる始末。業を煮やした宿の女主人は、花子を追い出す。

能「班女」はこんな曲



①最初に登場するのは、働かない花子にキレた宿の女主人（間狂言）。そこへ問題の発端である扇を手に、引きこもりで鬱状態の花子（シテ）が現れます。怒鳴られ、大切な扇を払い落とされ、「出て行け！」といわれ、シテは登場から約十分で退場（中入り）します。とても演劇的でわかりやすいプロローグです。

※この、間狂言から始まる珍しい構成は「狂言口開」と呼ばれ、他には「邯鄲」「鶴龜」「鷺」などがあります。

②扇ひとつ…とはいえ、愛の証しに取り交わした品は、今でいう婚約指輪レベル。待つほどに深まる愛、徐々に芽生える不信感：でも信じたい、諦められない女心。男は「仕事が終わったら来るつていったよね？」と。今も昔も男女の構図は同じ（？）でも、スマホがないからこそ生まれる壮大な恋物語ですね。

③ラストシーン、扇を見せよという少将に、花子は大切な形見の扇なので渡せないと一旦拒否。こちらにも形見の扇があるからお互いに確認し合おう、と少将も返答して、やっと扇の交換となるのですが。この若干まどろっこしいやり取り：少将と花子はずっと従者を挟んで対話しています。しかも薄暗い夕暮れ時。目の前の恋人の顔をなぜわからないの!?と思うなかれ。これこそ時代的ソーシャルディスタンスです。



番外情報

仕舞のお稽古でもおなじみ！舞充実の『班女』

お稽古でもおなじみの『班女』。仕舞は、狂女が物狂いして舞う場面から抜き出した、①基本の型を中心に一途な恋心と寂しさをゆったり丁寧に舞い上げる「クセ」。②扇を持ち変えたり、表裏と返したり、「羽根扇」の型をしたり、扇に想いを託して舞う「舞アト」のふたつがあります。能では他にも「中之舞」「カケリ」など舞事がたっぷり。まさに“扇”をかなめとした切ない物語の中に、優雅で狂おしい舞も存分に楽しめます。

※装束等は当日の演出により変わります。能『班女』永島充／撮影：芝田裕之

能「土車」はこんな曲

妻に先立たれた深草の少将は、その悲しみから出家を決め、幼いわが子を置き去りに失踪。実は長年の望みだった善光寺へと向かった…。

一人息子の乳父として少将に仕えていた小次郎は、残された幼子を土車に乗せ、憐れな「物狂い」となつて主君を訪ね歩いた末、出家者が多く立ち寄るという善光寺にたどり着く。

人々が集い賑わう門前で、小次郎は寺男から物狂いなら芸を見せる、やらないなら立ち退けといわれ、故事を引いて相手を論破しつつ、鞆鼓を打ち念仏を唱えて物狂いの舞を舞う。

群衆に紛れて見ていた少将は、かつての面影もない不憫な姿となつた二人に気づき、一瞬心が揺れるも、ここで立ち戻れば修行が水の泡になるからと知らないふりをする。

世に名高い善光寺まで来て、これほど多くの人々がいても、父どころか父に似た人にさえ会えない：と絶望した息子は、もう命は惜しくないと小次郎に告げ、二人は明朝にも川に身を投げることを決意。阿弥陀如来に魂の救済を願い最後の念仏を唱えるため御堂に戻る。

一方、一度は見ないふりをした父・少将だったが、やはり思いを断つことはできなかつた。引き返して二人を追いかけ、今にも投身しようとする二人を引き止めると、ついに父子は再会を果たす。

鑑賞ポイント

①「土車」は世阿弥の作品とされ、観世流・喜多流にのみ伝わる曲で、調べてみたところ公式には両流儀合せても数年に一度ほどしか上演されていない稀曲。（なので今回は写真もナシ！）もちろん、観世九皐会でも初上演となります。

②主役は、深草の少将に仕える家人で、息子の守り役の小次郎。本来三人の中では最も地味な立ち位置ながら、まだ泣いて駄々をこねるような幼子を乗せた車を引いて（まさに「子連れ狼」さながらの出で立ちで）父親探しの旅に出ます。

③小次郎の「物狂い」とは、子別れの母や夫や恋人を追う女性とは少し異なり、忠心から父子の再会だけを願つて身をやつし、芸を見せては物乞いをして命をつなぐ「遊芸者」という方がしつくり。教養も歌舞の素養もあるので、鞆（ささら）を摺り、鞆鼓を打ち、さらに故事を引いて寺男をも説き伏せる、超有能な影のヒーロー・番頭？執事？ボディガードです。

④能の上演頻度は非常に低い「土車」ですが、実は狂言の「小舞」の曲としては超ポピュラー！小さな子どもが習う入門曲としても有名です。もしかしたら聞き覚えがあつたりして…？



演者のひとこと

この曲にしか使わない作物が必要なため中々上演されません。舞台上で作物を引き摺る型も珍しいです。

男物狂というジャンルの曲自体が少ないのですが、色々な方の資料を見ても毎回装束や小道具、型が変わりそれぞれが工夫をしている事がわかります。

今回もはるか以前に上演された時の型付を基本に私なりのアレンジを加えて演じます。曲自体は芝居がかった面白い台本なので楽しんで勤めたいと思います。

中森 貴太

※装束等は当日の演出により変わります。能絵「土車」月岡耕漁

観世九皐会 10月定例会 @矢来能楽堂
2022年10月9日(日)【第二部】15時半開演

狂言『呼声』山本 泰太郎 能『土車』中森 貴太